

2022. 6. 19. 主日礼拝説教
聖書： マルコによる福音書 14 章 12～21 節
『まさかわたしのことでは』

みなさんは $6+9=15$ という表現が何を意味するかご存知でしょうか。

これは国際的共通記号として広く世界中で用いられています。6 はヒロシマ、9 はナガサキ、そして 15 は第二次世界大戦の終結を言い表しています。子供の頃、「長崎の鐘」という哀切漂う歌詞とメロディーを聴いて原爆や戦争、ひいては人間が持つ悲惨というものの緒端に触れた思いが致しました。この歌は 1950 年の同名の映画の主題歌として有名になりました。戦後初めて原爆を取り扱った映画です。しかし、GHQ の検閲が厳しく真っ向から原爆を扱えず、永井隆博士の半生を描くに留められています。

この永井博士とは現在の長崎大学医学部で放射線の研究をしていた医師です。そのため彼は原爆投下前から既に白血病のため余命 3 年と診断されていました。被爆直後から自らも重傷を負っていたのですが、懸命に市民の救護に務めましたが、連れ合いは自宅跡でロザリオを握ったまま骨片と化していました。

その後の救護と研究活動、白血病の進行で起き上がれなくなってからは多くの執筆に没頭されつつ 1951 年に永眠。43 歳の若さでした。

彼の著作を読み返すと、そこに描き出されるのは不平や不満や怒りさえもないのです。やがて権利の主張や被害者意識さえも声を潜め、ただそこにたゆとうと流れるのはキリスト者としての透徹した「祈り」なのです。

それは、その時代を生きた者として「わたしにも責任がある。それはわたしも罪人なのだから」という告白なのです。

本日の聖書の箇所は「裏切りの予告」です。過越の祭では慣例として子羊を屠って食事をしていました。元来それは犠牲の思想が含まれていたのです。けれども、この時代では犠牲の要素は後退し、食事は主として出エジプトにおける神の救済の業の記念と見なされていました。誰もが感謝の思いに満たされて食卓についたのです。

しかし、そこで展開されたのは楽しい食事などではなく、「わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」(18)という厳しいイエスの言葉でした。

もともとイエスが最後の晩餐で親しい弟子の一人による裏切りを預言したという古い伝承が存在し、広く伝えられていたようです。それをマルコは巧みに組み上げて行きます。

イエスの死は青天の霹靂ではなく予め予告されていました。しかし、裏切りはまさに弟子たちにとって初めて聞く事柄でした。彼らは口々に「まさかわたしのことでは」とつぶやきます。この言葉は否定の答を期待する疑問文です。なぜ彼らはイエスの言葉を否定せずに、裏切りが既に事実かのように、そして自分の身の潔白だけに関心を寄せて尋ねているのでしょうか。

それはイエスの言葉とは誰にも変えられない普遍性があるのだということが初代教会の告白だからです。更に、裏切り、すなわち罪というものは「十二人のうちの一人」(20)というふうに誰の内にも在ることを示します。それを「まさかわたしのことでは」と「わたしにはない」かのように振る舞う言動こそが実は裏切りなのでしょう。イエスは「あなたもわたしを十字架に架けたのだ」という深い責任ある自己認識から信仰が成立してゆくことを示されるのです。